

5. これからの防災への思い

(1) 災害発生の背景を考える

自然現象の影響をまともに受けないためには、対象となるものを少なくするか強くするかあるいは直撃を受けないようにするなどが考えられます。そして、そのような目をつけられないようにしつつ、それを助長させるようなことを避けるということが重要なことです。そして、暮らしに身近な土地の利用では可能な限りリスクの少ないところを選定し、適材適所な考え方を取り入れることではないでしょうか。目先のことを考えれば利便性が優先されますが、そこに長期的な自然災害の特性を考え、科学的な知見を活用すべきだと思います。

災害を助長させる要因として大きいのは気象変動で、人間が関係するといわれる温暖化の問題があります。最近では、これまでとは異なるさまざまな現象が生活の中で認識されます。例えば、海水温の高い状態が続くとこれまでとは異なる漁業環境になったり、降雨が同一エリアで長期間続いたり、台風の進路がこれまでと異なるようになって台風とは無縁だった地域がその影響を蒙るようになってきています。気象は地球の自然環境を支配する大きな要素です。気象は広い範囲に及んでいるため、さまざまなところで影響が複雑に関係することになります。そのために、私たちの生活環境が維持継続され、私たち自身の負荷を最小にするためには、あらゆる人間の活動を見直していく必要があります。

自然災害だけではなく、安心して暮らすことで、あらゆる可能性に挑戦できる社会を目指すことが出来ます。そのためには人と自然が共生することが重要なことでありその共生を持続させることを目指すことが重要になります。国連が掲げる SDGs は持続可能な空間に関するものばかりではありませんが、ここで示された 17 のゴール（個別には 169 のターゲット）すべてが相互に関係しているもので、これまでの流れのままでは地球も人間も存在不能になるということです。われわれの暮らし方を見直しして、更なる工夫や情熱を注ぐことで持続可能な空間を作る方向に向かうことが、豊かで安全で安定な社会を継続させることになるのだと思います。

これまでの行為を再評価することで、新しい価値の創造にもつながるので、思いつくものでいうと効率重視から価値を生む社会への転換、多様な才能が発揮できる社会の実現、安心して暮らせる住環境の実現、環境負荷大・資源多消費からの解放などが重要な課題になると思われます。それにはしっかりとデータに基づいて評価しながら

ら、修正を継続することが大切で、先送りをするにはできない状況にあるという危機感と関心を持っておく必要があります。

自然災害は、地形地質が素因で気象が誘因というような単純というか限られた要因が反応するものではなく、われわれの暮らし方が深く関係しているということを認識する必要があります。つまり、自然災害は必ず起きますがそれを最小にするには、あらゆるものをリスクマネジメント的な考え方で分析評価して対応しなければなりません。少なくともこの複雑なものを解きほぐしていく方向に向かうような新たな構想が求められています。とても限られた分野だけで対応できるものでないということを認識して、小さいことからでも実践していくことが一人ひとりに与えられた責務でもあると感じています。